思想・文化情況の〈現在形〉を射抜く
批判的視座を求めて

La Vue ラ・ヴュー

No.4（2000/12/01号）

発行人：山本繁樹
発行所：るな工房＠黒猫房出版／シャノワール・カフェ
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
TEL/FAX 06-6320-6426
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail：YIJ00302@nifty.ne.jp

目　次

◆生命学者の森岡正博さんに聞いてみよう
——大切な「本人の意思」原則—臓器移植法「改正」に異議あり!
……大阪府立大学総合科学部教授　森岡正博
◆書物受難の時代……福嶋　聡
◆シドニーは燃えているか
——あるいは日本〈的〉サッカーの行方
……山口秀也
◆横に立つ　——演劇を遠く離れて
……桃田のん
◆千早振る『うつ病者の手記』三年目
……時枝　武
◆言葉という原罪　——「癩」の表記をめぐって
……森ひろし
◆編集後記

No.5は2001/03/01発行予定です。

■無断転載を禁じます■

「脳死」と臓器移植

生命学者の森岡正博さんに聞いてみよう

——大切な「本人の意思」原則—臓器移植法「改正」に異議あり！

大阪府立大学総合科学部教授　森岡正博

——臓器移植法が「改正」されるとのことですが、どういうことですか。

今年八月二十二日に、厚生省の研究班の班員である町野朔・上智大教授が、現行の臓器移植法を改正する案を作成して、厚生省に提出しました。臓器移植法が、この秋の国会で見直しの論議にはいることが予定されていて、それに向けてのステップだと考えられています。

私は、今年の二月から、「町野改正案」に対する反対を表明しており、『論座』八月号では町野氏と激論を行いました。私の立場は、現行の臓器移植法の大原則である「本人の意思」原則は変更するべきではないというものです。これに対して町野案は、この大原則を崩して、「脳死の人」からできるだけ多くの臓器を取ろうというものです。

——十月前後から、新聞・TV・雑誌等のマスコミによる「見直し」の報道がされ、その反対集会なども活発になっている割には、一般の人々の関心は低いように思われます。

そうなんです。身近な人々に聞いてみても、臓器移植法が「改正」されるかもしれないということを、知っている人はごくわずかでした。なるべく多くの人々に今回の見直しについて知っていただき、それぞれ自分自身の問題として考えてほしい。そのうえで、もう一度、脳死と臓器移植法について、国民的議論を行うべきであると思っています。

——そもそも、なぜ臓器移植法の「改正」の動きが出てきたのですか。

それを理解するためには現行の臓器移植法の仕組みを知っておかなければなりません。臓器移植法では、（1）脳死になった本人が、あらかじめドナーカード等によって、脳死で死を判定してよいという意思表示をしていること、（2）脳死になった本人が、移植のために臓器摘出をしてよいという意思表示をしていること、（3）家族（遺族）がそれを拒まないこと、の三つの条件が満たされたときにのみ、脳死の人からの臓器摘出ができると定められています。

ここで注目すべきは、脳死になった人の「本人の意思」を前提条件としている点です。これは「本人の意思」原則と呼ばれるもので、脳死臨調において確認された日本の臓器移植の大原則なのです。私の生と死に最終的な責任を持つのは、ほかならぬこの私自身だという厳粛な思想がここにはあります。

「私は脳死を人の死だと思うし、移植によって病気の人を助けてあげたい」という明確な意思を持った人から臓器を摘出し、移植に役立てる。そのかわりに、そのような意思があったのかどうか分からない者からの臓器摘出はけっして行わない。このように明記している点において、日本の臓器移植法は、脳死を経て死んでいく者の「人間の尊厳」を世界で最も尊重する法律なのです（他国では、家族の承諾があれば移植できる）。

——「町野案」の「改正」ポイントと問題点を教えてください。

現行法は「本人の意思」原則を前提条件にしていますから、ドナーカードを書かずに脳死になった人からは、臓器摘出ができないことになります。臓器を待っている人はたくさんいるわけだから、これは都合悪い、という意見が出てきた。それらの声を受けて、「本人の意思」原則をはずして、もっと臓器が出やすくなるように法律を「改正」してはどうかという動きが出てきたのです。これがはじめに紹介した町野案のポイントです。

町野案が、もし国会で通ってしまうとどうなるでしょうか。まず、「脳死＝人の死」ということが、法律で一義的に決められることになる。現行法では、脳死を人の死と思わない人は、けっして自分の死を脳死で判定されることはない。脳死を死と考えない権利が守られています。ところが、町野案になれば、脳死が人の死として強制されることになります。

第二に、脳死になったときに臓器を取られたくない人は、あらかじめドナーカード等によって「私はいやだ」と意思表示しておくことが義務づけられま

「人間とは何か」に最終解答をもたらすゲノム解読!!
ゲノムが語る23の物語
マット・リドレー
中村桂子、斉藤隆央訳
人のDNA情報、ゲノムの解読が完了した。人の運命を司どり、人類の太古の歴史の謎を秘めるゲノムのメッセージとは？　人の染色体数にあわせた23の驚異の物語。　12月上旬刊◆2400円
ゲノムを読む
人間を知るために
松原謙一、中村佳子
「ヒトゲノムプロジェクト」立ち上げ時のリーダーが語る、その全体像、将来の行方。◆1800円
紀伊國屋書店
出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業tel03（5469）598　表示価は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

本邦初訳
エケリニス
—ヨーロッパ初の悲劇—
土居満寿美著・訳　本体3500円
桂冠詩人ムッサートの意欲作
教育への視座と提言
奥野郷太郎著　本体1700円
転換期の「教育」とはなにか!?
経済原論
山田勝裕著　本体2400円
「経済学」をやさしくレクチャー
憲法を読む
千葉勇夫著　本体2900円
今、憲法は生かされているか!
アリーフ　一葉舎
京都市左京区田中関田町26
TEL075-705-0088 FAX075-705-0080

娘天音（あまね）妻ヒロミ
重い障害をもつこどもと父の在り方
山口平明
定価一六八〇円
反響続々！
不思議の天音（あまね）
イノチの際で共に棲まう私たちの日々
山口平明著
山口ヒロミ画
定価一六八〇円
（税込）
ジャパンマシニスト
〒413-0001 静岡県熱海市泉44-20
☎0465-64-0887　FAX 0465-64-0889

おにいちゃんだから
福田岩緒
お父さんとお母さんはすぐに「おにいちゃんだから」っていう。でもぼくは弟のたかしが大きらいなんだ。きょうも一発なぐってやった！
■定価　本体1200円（税別）
森のスケーターヤマネ
湊秋作 著／金尾恵子 絵
生きている化石といわれるヤマネ。体重十八グラムの小さな体で、どのようにして生きのびてきたのか、その習性・生態を描く。
■定価　本体1200円（税別）
文研出版
〒113-0023東京都文京区向丘2-3-10
TEL（03）3814-6277
〒543-0052大阪市天王寺区大道4-3-25
TEL（06）6779-1531

ポリロゴス2
メディア——越境する身体
中山　元 編
A5判並製／296頁／本体2400円
■小特集
メディオロジー
アントナン・アルトー
［翻訳］
レジス・ドゥブレ
アントナン・アルトー
ミシェル・フーコー
モーリス・ブランショ
ジル・ドゥルーズ
近刊
正義という病—ためらいの倫理学
神戸女学院大学教授　内田　樹 著
四六判並製／270頁／予価2000円
あらゆる「正義」と闘う、清冽な思想（鈴木晶氏）
冬弓舎
京都市左京区一乗寺馬場町10
Tel&Fax:075-722-3267
http://thought.ne.jp/

す。もし、いやだという意思表示をせずに脳死になった場合は、法律によって「あらかじめ臓器提供に自己決定して死んだ」ものと見なされてしまう。あとは、家族さえ承諾を与えれば、臓器は本人の意思とは無関係に摘出されてしまうのです。

このように、厚生省に提出された町野「改正」案は、脳死を人の死と考えない人（日本人全体の約三割）の権利を踏みにじるものであると同時に、本人の意に反した臓器摘出を一定の確率で生じさせる危険性をはらんだ、拙速きわまりないものなのです。

――子どもからの臓器摘出も問題になっていますが…。

そうです。もう一つの論点として、十五歳未満の脳死の子どもからの心臓摘出が、日本の臓器移植法ではできないということがあります。これに関しては、子どもにもドナーカードで意思表示（自己決定ではない）することを許容してはどうかと私は提案（対案）しています。子どもの場合でも、「本人の意思」原則は貫くべきでしょう。逆に言えば、子どもの意思表示がなければ、親の承諾があっても臓器摘出はできないということです。年齢設定等の妥当性については、今後、議論を続けていきたいと思っています。

十年以上の議論を経て獲得した「本人の意思」原則を、大人についても子どもについても、徹底して堅持することが人間の尊厳をもっとも手厚く保障する社会のやり方なのです。

――臓器移植を待つ者の医療アクセス権あるいは尊厳はどうなるのか、という反論がありますが…。

それについては、不運にして脳死になった者の人間の尊厳を保障したそのあとで、はじめて、移植を待つ者の人間の尊厳は考慮されるのです。臓器摘出というのは、脳死の人自身の治療にはまったく役立たない手術です。それを合法化するわけですから、不運にも脳死になった者の尊厳を第一にするのが、守るべき順序なのです。

そして脳死になった者の人間の尊厳の保障は、なによりもまず、「本人の意思表示」原則堅持によってなされるのです。

世界中で「臓器不足」と呼ばれる現象があり、「臓器不足」を解消したいのであれば、このような後ろ向きの法律改正によってではなく、情報開示と正しい知識をともなったドナーカードの普及によって解決していくべきであると考えます。

「あげたい」と明言している人からの臓器を受け取ることが、レシピエントが真に望むことであるはずで、「あげたい」と言っていない人からの臓器であってもほしいと望むようなレシピエントは、ほんとうはいないはずです。臓器移植法をこれ以上後退させてはなりません。

――しかし、森岡さんの提案（対案）に対して「脳死反対・臓器移植反対」の立場からは、森岡案は町野案よりは穏健であるが、「自己決定」の過大評価とドナーの年齢引き下げ提案は、むしろ臓器移植法の拡大に荷担しているとの批判があります。

森岡さんの真意とは別に、厚生省や推進派が森岡案を政治的に利用する可能性は大きいと思いますので、質問者もその点には重大な関心があります。批判への森岡さんの反論をお聞かせください。

そうですね。「脳死反対・臓器移植反対」の立場からすれば、私の案は、中途半端なものに映ることでしょう。私個人は、脳死は人の死だとは考えていませんが、しかしながら脳死が人の死であると考えているきわめて多数の人々の死生観は尊重すべきではないかと思います。細かい点ですが、私の案は、十五歳未満の子どもに関しては、親権者の事前の積極的承諾を必須とするというものです。現行法の場合、十五歳以上では、臨床的な脳死状態になったあとで「家族が拒否しない」ことが必須条件となっていますので、それよりも厳格な条件を課すことになります。

私の案は、ごりごりの推進派と、ごりごりの反対派の中間地点に位置しています。その意味で、どちらからも政治的に利用される危険性をはらんでいると思っています。

穏健な反対派も、私の案を政治的に利用することはできます。子どもの事前の意見表明と親の事前承諾を必須とするわけですから、町野案や移植学会が考えている案に比べて、子どもからの臓器摘出数は激減するはずです。

私としては、反対派の方々には、私の案と町野案と、どっちのほうが悪の度合いが少ないかというふうに考えていただきたい。まずは、町野案を却下することで共闘しないと、反対派は分裂してしまって、共倒れになり、町野案が漁夫の利を得ます。反対派を内部分裂させ、仲間割れさせておいて、まんまと漁夫の利を得ようという政治がすでに水面下で動き始めていることに、注意を払うべきです。まずは町野案を却下することに全力をかたむけ、そのあとでゆっくり時間をかけて議論をすればいいのではないでしょうか。私は、町野案が採用されるくらいなら、反対派の言う法案撤廃が通る方を選びます。「推進派＋準推進派」ｖｓ「（森岡のような）慎重派＋移植反対派」という闘いをしないと、慎重派・反対派に勝ち目はありません。もし「移植反対派以外のすべて」ｖｓ「移植反対派」ということで闘ったら、その結果は、町野案かその修正案のひとり勝ちになります。私には、後者のような選択が、これからの日本の医療をよりよくしていくことに貢献するとは思えません。

――最後に、この「改正」案への反対運動をウェヴで展開されていますが、その試みの手応えは如何ですか。

インターネットで反対運動をしていますが、予想以上の手応えがあります。まず、ホームページはすぐに書き換えられるので、最新の情報や状況などをすぐに紹介することができます。また、掲示板で、この問題に関する活発な議論がなされています。過去ログもとっていますから、すでにかなりの先端情報が集積されました。議論の中から、「てるてる案」という対案も誕生しています。リンクもたくさん張っていますので、ぜひみなさんも来てみてください。（http://member.nifty.ne.jp/lifestudies/ishokuho.htm）。生命倫理運動で、はじめてインターネットを本格的に活用した試みなのではないでしょうか。

（「メール・インタビュー」二〇〇〇年十月二十九日、質問・構成＝編集委員・山本繁樹）

■（もりおか・まさひろ）一九五八年、高知県生まれ。大阪府立大学総合科学部人間科学科教授。人文科学、社会科学にまたがった学際的・総合的研究（現代思想・生命倫理・環境論・ジェンダー論・臨床心理学・科学論）専攻。著書として、『生命学への招待―バイオエシックスを超えて』（勁草書房）、『生命観を問いなおす』（ちくま新書）、『増補決定版　脳死の人』（法蔵館）など多数。
http://member.nifty.ne.jp/lifestudies/

書店人として

書物の受難の時代

福嶋　聡

書物の受難の時代である。

その大きな契機が、コンピュータ技術の進歩、インターネットの急速な普及、と言えば、語り尽くされたテーマとの感もあろうが、もしそれが、単に「印刷媒体／電子媒体」という図式のもとでの両項の対立、凌ぎ合いであるとしたら、ぼくの言う「受難」は、少し違う。ぼくには、書店人として、書店現場、出版業界へのコンピュータの導入を強く訴えてきた経緯があり、昨今の業界の情報インフラの整備には、大いに賛同しているからだ。

言いかえれば、ぼくの言う「書物の受難」は、「コンピュータの普及のゆえに」ではなく、「コンピュータの普及にもかかわらず」起こっている事なのだ。書物の立場からは、「あてが外れた」というべきか。コンピュータの導入によって、もっと生き生きと光るはずだった書物が、むしろ傍らに押しやられている状況を言うのだ。

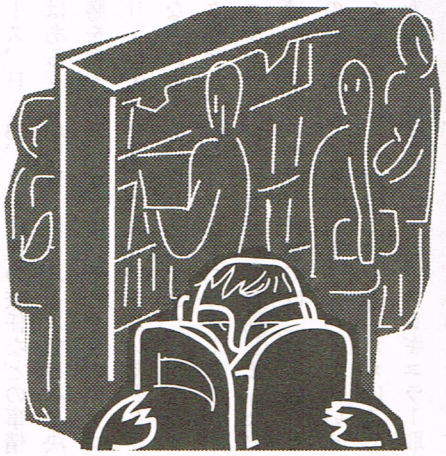
そもそも出版・書店業界にコンピュータ導入を促がしたのは何か？　われわれの業界が書物を販売する事を生業としている以上、あくまでもその合理化の為である。業界全体の売上の頭打ちから下降、返品率の増大と閉塞感が高まる一方、新刊点数だけは増え続ける。それでも、出版社・書店は本が売れないと嘆き、読者は欲しい本が見つからない、と嘆く。

そうしたすれ違いの原因は、例えば配本のしかたの問題、販売情報のフィードバック即ちマーケティングの問題、広告や書評と店頭在庫の連動性の無さの問題など色々と数え上げる事が出来るが、一言でいえば、業界

全体の情報武装化の遅れであったと言える。それを踏まえてぼくは、『書店人のしごと』（一九九一年、三一書房）で書店SA化から業界SIS化への構想を訴えたが、その時差し当たりの範としたのは、「チケットぴあ」型のシステムであった。劇場側はチケットが売れないと嘆き、観客側はチケットが買えないと嘆く。「チケットぴあ」型のシステムを要請した状況が先ほど述べた、書物を巡る供給側と読者側の状況と同型のものだったからである。そして目指すべきは、すべての空席を観客に提供するように、流通している書物を読者に提供する環境の整備だったのである。

以来、コンピュータの普及は予想以上に加速し、インターネットは多くの人に身近なものとなり、出版・書店業界においても、日本書籍出版協会、多くの出版社、取次、全国チェーン書店が、次々とホームページを立ち上げている。マーケティングに関しても、書店でのPOSデータを電子情報で出版社に提供するのが当たり前の時代になってきた。

しかしながら、「すべての空席を観客に提供するように、流通している書物を読者に提供する」という目標には、まだまだ程遠い。インターネットで在庫の有無を確認できるといっても、例えばそれは出版社在庫であり、市場に流通している書物を探せる訳ではない。インターネット書店にしても、せいぜいその書店の在庫を確認できるだけで、「そこまで足を運ばなくても、その書店での買い物が出来る」ようになっただけに過ぎないとも言える。現在の業界の構造、企業的発想からは、そこまでが限界だと言われるかもしれない。市場在庫を調べ上げるなど、技術的にも不可能だと言われるかもしれない。「すべての空席を観客に提供するように」などというのは、非現実的な夢想だと一笑に付されるかもしれない。しかし、理念は理念として、常に持ち続けるべきである。今のぼくには、ネットワークの作り方など具体的な方法論も提示できず、早晩解決できる問題では決してない事も充分承知したうえで、そのことは強く訴えたい。この理念は、返品率や販売機会損失の問題、今や業界全体を麻痺させるやもしれぬ病巣の解決へのひょっとしたら唯一の道であり、よしそれが長く険しい道のりであれ、一歩一歩前進するしかないからである。そのために今まず必要なのは、ラディカルな意識改革であろう。書店現場でもっとも間近に読者と接している身なればこそ、そのことを痛感しているのである。



一方、出版業界・読者双方の志向が、そうした苛立ちに満ちた現状を、一足飛びに跳び越してしまう方向へと向うのも、ある意味で当然かもしれない。書物の編集作業にコンピュータが使われるのが当たり前になった今、作り手が「画面上で完成しているテクストを、何故改めて紙の上に印刷しなければならないのか？」という疑問を持つのも、パーソナルコンピュータがどんどん普及し、インターネットへのアクセスも普通のことになった今、読者が「容易に自分のコンピュータにテクストを取り込める時代になったのに、何故改めて書物を購入して所有しなければならないのか」と考えるのも、実に自然なことだからである。曰く電子本、（やや折衷型ともいえるが）オンデマンド出版、或いはインターネット上の電子テクストそのもの…、それらへの志向性の高まりが、文字通り「書物の受難」なのである。

結局は「印刷媒体／電子媒体」という対立図式に行き着いたではないか、と言われるかもしれない。ただ、その両項が最初から対立関係であった訳ではないことは、押さえておきたい。出版・書店業界においては、書物（印刷媒体）の製作と販売のために、コンピュータは導入されたのであり、実際コンピュータはそれらの目的に多いに寄与してきた、そして今後もっと寄与する可能性は大きい。ただ、その為には乗り越えるべき障壁も多い。それは、業界全体の構図、システム、否、単なる慣行、更に言えば固定観念、或いは各構成員（企業ならびに個人）のエゴイズムであり、だから、まず必要なのはラディカルな意識改革であり、その行程は長く険しい道のりなのだ。

繰り返す。その「長く険しい道のり」を回避してはならない。電子媒体の優位を説く人々は、そこに保守性を見て批判するかもしれない。書物を販売することによって収入を得ている書店人の保身を論うかもしれない。それに対して、書物という形態の簡便性、電子データに比べての堅牢さ、様々な属性でもって反撃する方法も少なくはない。しかしながら、そうした技術的な凌ぎ合いを細かく検討する準備も意図も、今のぼくにはない。むしろ、ぼくをかの主張に駆り立てるのは、書物というパッケージ商品の持つ逆説的な開放性の実感である。一冊の書物と読者の出会いの頼りなさ、それゆえの可能性、その出会いを場として演出するこれまた頼りなげな書店空間に、むしろ開放性と可能性を感じるからだ。翻って言えば、いかにも開放的であるかのようなインターネット空間を行き交うテクスト、言説にある種の閉鎖性を感じてしまうからなのだ。書店現場の「頼りなさ」ゆえの「可能性」（＝開放性）に対して言えば、それは、「頼り甲斐」ゆえの「必然性」（閉鎖性）とでも呼べきだろうか。「閉鎖性」に帰結してしまうのは、「頼り甲斐」の傍らに、実は多くの前提条件、即ち越えるべきハードルがあるからかもしれない。

インターネットを利用するためには、まずコンピュータを持っていて操作できること（私有していなくてもいいから、より正確には、コンピュータを利用できる環境にあること）が、当たり前であるが、最初のハードルである。パーソナルコンピュータの急速な普及によってそのハードルを看過する言説が増えたが、それが一つの「排除性」であることに違いはない。（「排除性」は勿論「閉鎖性」に繋がる。）次に、必要なアーカイヴにアクセスするためには、そこに至る水路を知っている必要がある。勿論、ホームページのリンクや多くの検索エンジンなど、様々な水先案内人が手を貸してくれることは否定しないが、どこまでも、その邂逅には「予定調和」の影を感じてしまうのだ。

三木清に次のような文章がある。

「すべての書物は、それが出来上がった後には、著者から離れた独立の運命をもって存在するに至る。著者は彼の書の享けるあらゆる運命を愛すべきである。私は私の書物が欲するままに読まれ、思うままに理解されることに満足しよう。」（『パスカルに於ける人間の研究』「序」京都哲学撰書第二巻　燈影舎）

「著者から離れた独立の運命」は、頼りない書店空間をあてどなく彷徨う書物という形態にこそ、相応しい。著者の、編集者の、そして読者その人の意図をも超えた、書店現場における書物と人の出会いに、より大きな公開性を、九鬼周造なら「積極的偶然」に含めるであろう予期せぬ邂逅の可能性を、ぼくは感じるのだ。

ラディカルな（根っこからの）視点で現在の出版のありようを捉え、刺激的で具体性に満ちた提言に満ちた松本功氏の『ルネッサンスパブリッシャー宣言』は、「日曜日の三省堂書店の人混み」と「本の危機」の非対称から論が起こされる。松本氏は、「本の危機」を救うべく、電子媒体との共闘、電子媒体の柔軟な利用を含めて、独自の戦略を展開する。出版の役割、学問や市民社会の現状と未来を広く視野に収めた氏の議論には大いに共感し、是非とも共闘したいと思う。ただ、一人の書店人としては、「日曜日の三省堂書店の人混み」の意味にもこだわっていたい。多くの書き手、出版人の情熱と「人混み」を架橋することが、現時点においてぼくらの第一の仕事だと思うからだ。❦（『カルチャー・レヴュー』09号掲載を改稿）

■（ふくしま・あきら）一九五九年生まれ。京都大学哲学科卒業。八二年二月、ジュンク堂書店入社。現在、ジュンク堂書店池袋店副店長。日本出版学会、会員。著書に、『書店人のしごと』『書店人のこころ』（以上、三一書房）

増補決定版
脳死の人
森岡正博 著
定価：2400円＋税　四六判
ISBN4-8318-5603-7
日本の脳死論議の地平を切り拓き、方向を決定づけた名著に、「移植前夜、医師たちへの講演」と「子どもの脳死問題」の二篇を増補。脳死・臓器移植問題を考えるための必読書。
法蔵館
〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入
TEL:075-343-0458　FAX:075-371-0458
http://member.nifty.ne.jp/HOZOKAN/

書店人のこころ
福嶋　聡 著
定価2000円＋税　四六判
ISBN4-380-97209-7
再販制の見直し、消費税改正による定価表示の変更、超大型書店の林立など、出版・書店業界に次々と寄せ来る大波をいかに乗り越えるか。マルチメディア時代の書店のサバイバル戦略を、現場の目から考え、指し示す。
三一書房
〒113-0033 東京都文京区本郷2－11－3
TEL：03-3812-3131　FAX：03-3812-5400
http://www.san-ichi.co.jp/

スポーツ／サッカー

シドニーは燃えているか

――あるいは日本（的）サッカーの行方

山口秀也

シドニーオリンピックサッカー決勝。ワールドカップの決勝にかならずつきまとうある種の緊迫感から大きく隔たったおおらかさがここにあった（ここでいう緊迫感はけっして褒め言葉ではない。それらの決勝戦がおもしろかったことなど一度もなかったのである）。二十三歳以下の大会らしく攻めの意識の高い、（若い）試合を観て「所詮オリンピック」というおもいを抱きつつ意外と愉しんでいた自分に気がついた。

興業面でワールドカップにひけをとらないチームをそろえること、そのためにスタープレーヤーを参加させたい国際オリンピック委員会（IOC）と、各国のリーグ戦やチャンピオンズリーグとちがい、オリンピックが年間のカレンダーに組み込まれていないFIFA（国際サッカー連盟）との奇妙な合意、大会に二十三歳以下の参加制限を設けたうえで三人のオーバーエイジ枠を認めるという変則的な方法で行われるオリンピックのサッカー競技。結果、ワールドカップ予選が始まっているところへ、さらにオリンピックに選手を取られたくないという各クラブの（日本のプロ野球のセリーグのごとき）思惑も絡み、とくにヨーロッパの一流クラブではレギュラークラスの選手を出さないケースが多く、多分にレベルの低さを指摘される大会であった。それでも冒頭にのべたように愉しめたことの理由を、誤解をおそれずにいえば、ワールドカップほどには（サッカー界にとってオリンピックの重要度が低いゆえ）勝つことにとらわれない姿勢が、どのチームにも攻撃的なスタイルをもたらした、ということではないだろうか。

日本のばあいは少し事情がちがってくる。数人の選手の入れ替えが必要になるとはいえ、オーバーエイジ枠をつかうと、ほぼフル代表の実力が備わったチームができあがる。しかもいまの日本は、エレベーター式の付属学校のように、ワールドユース準優勝チームからの持ち上がりといえるようなチームである。つまり、フル代表をベースに、伸びてきた若手を拾い上げるのではなく、成功した下の年代のチームをベースにしているのである。では日本は、今大会出場チームのなかでは高いレベルのチームを組んだスペインなどとくらべるとどうか。九八年フランスワールドカップ後、監督の交替にともなうドラスティックな選手の入れ替え、新監督によるユース、U―23、フル代表の兼任などの事情はある。しかしワールドユースで日本と決勝を戦ったスペインは、それぞれのカテゴリーの大会を通じて厳しい振るい落としがなされ本大会に乗り込んできた。自国やイタリアなどのトップリーグのチームでレギュラーを張っている選手は参加していないばあいが多いので、厳密には二十三歳以下のチームとしてもベストメンバーとはいえない。逆に、今回出てきた選手たちはこの大会での活躍を自チームでのレギュラー取りもしくは、ビッグクラブへのステップアップの布石と考えているのである。くらべて日本は、中田英寿をのぞいた全員が世界市場でほぼ無名の存在なのである。

しかも日本国内では、オリンピックにおけるサッカー競技のこのような特殊な事情を（おそらく意図的に）捨象して、他の競技とおなじ次元であつかっている。たとえば柔道、水泳などの競技で準々決勝敗退がどれほどニュースバリューに欠けるかを考えてみるといい。それでも世間がかくもサッカーをもちあげるのは、マラソンの高橋尚子と柔道の田村亮子、女子水泳のメドレーの優勝のつぎにサッカーチームの準々決勝〈対アメリカ戦〉が高視聴率をとった結果からも明らかである。いま述べたようなことは、すぐマスコミに左右される付和雷同的な日本の状況を語っているにすぎないが、それでも日本のサッカー界自体を覆う空気をいくらかは反映しているとはいえるかもしれない。

たとえばその甘い達成目標。オリンピックで良い成績を収めるのも、最終的な目標は二〇〇二年のワールドカップのためであるはずである。その意味ではただ日本が勝ち進めば良いという訳ではない。決勝トーナメントにコマを進めた日本は決勝で再度ブラジルと当たって因縁の対決を制するだとかいうことよりも、二年前のワールドユース決勝の相手スペインと準決勝で対決することをこそ目指すべきではなかったか。〈借りをかえす〉などという浪花節ではない。当時、初の世界大会の決勝進出に、協会も監督も選手も舞い上がり、決勝の対スペイン戦を、およそ出鱈目に戦ってボロ負けしたことの反省こそが大事ではないのか。世界との差を測る格好の舞台を、小野の不在が原因であったにしてもふいにしてしまったことがいまでも悔やまれる。なるほどアメリカ戦は貴重な戦いではあったが、今回はとくに、スペインもしくはイタリアという、世界標準の国と戦う必要がどうしてもあったとおもわれてならない。オリンピックのあとに控えるアジアカップでの厳しい戦いはもちろん、二〇〇二年まではいかに厳しい戦いをひとつでも多くこなせるかにかかっている。しかし、日本サッカー協会にその意志と実行力が極めて希薄な現状にくわえ、無批判にチームや選手を持ち上げる日本の風潮（サッカー解説者でさえ）が甘えを招来するのではないかというのが正直な感想である。中田以外、「殺るか、殺られるか」というさしせまったギリギリの戦いに身を置く選手がいない以上、チーム単位での修羅場の経験がなにより肝要である。

先述したように、結果的にオリンピックは攻撃的な振るまいが許される舞台である。ではそういったシチュエーションで日本はどう戦ったのか。かつてのゴール欠乏症のときとくらべ、コンスタントにゴールを挙げているにもかかわらず全体としてアグレッシヴさを欠いていたようにおもわれる。分かりやすいところで、アメリカ戦でベンチが動かなかったこと、またブラジル戦で積極的に勝ちにいかなかったことにそれは象徴される。もともと世界にかろうじて通じる攻めをできる布陣のポイントは、右に三浦（本来の右翼に攻撃的な人材が少ないため）、左に本山を配するものである。しかし、これを試合の膠着した、あるいはもっとハッキリといえば、同点か負けているときのオプションにしているということは、最近の日本代表にたいする評価とは逆に〈層の薄さ〉を物語っている。このフォーメーションを最初からつかうと、勝負どころで打つ手がなくなる。なるほど、右に酒井（あるいは明神）を置き〈左の攻撃、右の守り〉と、バランスの重視を強調しているトルシエであるが、今回、日本が攻めこまれる場面で、左サイドハーフの中村俊輔が、自軍のゴール前まで、引きずられ戻ってくる場面を多く目にすると、苦しい台所事情をごまかすための方便にも聞こえる（これはスリーバックの左に服部を起用することであるていど解消できるとおもうが）。守備では、スリーバックそのものについて今回も、相手の速いドリブルに振り切られたり、最終ラインの裏へのスルーパスにGKの楢崎が引きずり出される場面が多々あった。これには名波と稲本の起用によるダブルボランチとの連繋をもっと密にする必要がある。そして攻撃では、右の酒井が引いた前のスペースを、タッチライン沿いにFWの高原が何度もドリブルで攻めあがっていた。すると当然中が手薄になる。ゴールはいきおいセットプレーに委ねられることになる。けっきょく、いまの日本の試合を見ていると後半途中まで、悪くて〇―〇の同点、セットプレーで一点を取って、このフォーメーションでいけるところまでいって、最後に二枚ほどのカードをきる展開が多い。トルシエの采配に神だのみに近いものをかんじるのは私だけであろうか。

テクニックに長けたプレーヤーたちの有機的なつらなりによるゆるぎないシステムの確立は、身体能力の差を補うための日本の生命線である。中盤でのパスワークは、現時点においても目をみはるものがある。あとは、より創造的な選手の起用、各パーツの蝶番の修繕、選手、チーム双方のよりきびしい戦いの経験をのぞむのみである。日本サッカー協会の有益なサポート体制づくりを言いつづけてもう何年経つだろうか。

チーム（選手）、監督―スタッフ、サッカー協会、評論家（解説者）、サポーターすべてが、自信をもつこと。ピッチ上でのパフォーマンスはあがってきた。しかし、肝心のゴールへのアプローチがものたりない。ディフェンスラインからのシンプルなフィードから、中盤の速く、美しくかつ力強い展開、そこから一気に相手ゴールをおとしいれる。そんな場面を夢想している。楢崎、森岡、松田、中沢、中田（浩）、服部、稲本、名波、明神、中村、本山、小野、中田（英）、奥、アレックス、森島、西沢、高原、久保、林。頭の中で加えては外し、夢のフォーメーションを考えつつ。

■（やまぐち・ひでや）小学五年生のとき、混戦からつま先で蹴りこんだ最初のゴールからもう二十六年経った。関心領域は、音楽、映画、食文化。フリーランサー。「哲学的腹ぺこ塾」塾生。

演劇

横に立つ

――演劇を遠く離れて

桃田のん

「お料理、ケーキづくり、お裁縫」といった家事の創作面には不熱心極まりないが、「片付け、処分、収納」といった整理面にはやる気満々で取り組む。「ひとりでできるもん」という教育テレビ子供向け番組の中で、まいちゃんという女の子が歌いながら教えてくれた「ケチケチため水洗い」。たった洗い桶三杯の水で、食器のすべてを洗うという。やらねばならぬ、と思った。

その甲斐はあった。台所には食器がかすかにふれあう音だけが響く。カタカタカタカタ、わずかの水がスポンジとともに流れ動く音ともいえぬ気配。三十年近くも前の、祖母のいた長崎の台所の記憶を呼び戻された。祖母の洗った食器は冬でも、水切り篭のなかで冷たかった。イトという名の明治三十三年生まれの女は、少々の寒さでは湯を使わなかったのだ。使えなかった、という方が正確だろう。そしてルリ子というなかなかモダンな名を与えられた大正十三年生まれの母は、そんな片付けを「油汚れがとれない」と嫌がった。祖母は究極の「ケチケチため水洗い」をしていたのだと思う。試してみると「ケチケチため水洗い」には、かすかに貧乏の匂いがした。それは祖母や父の所作の匂いと似ていた。ともかく控えめで、つつましかった。微細な日常的所作は、人生への向き合い方を凝縮しているのかもしれない。貧乏性の私とは相性のいい洗い方だと思った。

貧乏性で思い出すことがある。一九九四年、「あなた次第」という公演後のことだ。バラシが終わった劇場には缶詰がごろごろしていた。食事を出す作品の見込み違いで、大量の余りが出たのだった。ベテラン劇団員は若手に「持って帰り。持って帰り！かまへん、かまへん！」と威勢良く振舞っている。作品の不評もあいまって、私にはカチンときた。缶詰とはいえ、苦労してとった助成金や広告収入や自費で賄ったものなのだ。私は、後にこう言った。「あなた方は、私の人生の消費者にすぎない」。購入を任せたなら、最後まで文句をいわないのが人物というものだ。ベテラン劇団員の振る舞いは正しい。俳優は「人前で何事かを行う」といい、演出家の場合なら「人の上に立つ」「作品をリードする」などの表現を用いる。俳優であれ演出家であれ、道筋を指し示し、統括する能力が必要だということだろう。缶詰ひとつを気にするようでは、人前にも人の上にも立てない。確かに演劇の世界で成功した知人を思い起こせば、秘めた野心とそれなりの権力欲、加えて緻密な計算があった。私には、そのどれも中途半端な形でしかなかった。いろいろ考えたこともあるが、劇団が解散に至ったのは、つまるところ器でなかったからだ。

この五年、家内の整理・収納とともに、自分のさまざまな感情の収め場所も探してきたように思う。時折訪れる痛い思いは「そのまま籠」に入れて静観し、捨てたいものは捨てられる時期を逃さず捨てる。平坦な日常から芽生えてくるものには、大切に少しずつ水を与える。そうやって悔恨とか羞恥とか焦燥といった硬い感情を、御しやすい思いへと分解してきたのだと思う。私は人の上にも、人の前にも立てない。ならば、後先になりながら肩を並べて歩いていくことはできまいか。劇団を解散してから、子育てとともに地味な形で続けてきたことは、そんなことだったような気がしている。

今年の春、二ヶ月かけて難波の精華小学校跡で「本を読む」というワークショップを行う機会があった。もともとは友人でもある岩村原太という照明デザイナーが発案したもので、彼の主宰する西陣ファクトリーガーデンという場所を劇場に、ふたりの俳優とともに創作上演してきたものだった。二人とも演技の幅の広い人ではなかった。その意味では自分であることに頑固な人たちで、精神の柔軟性と演技者としての器用さとは必ずしも一致しないことを示していた。

「横を歩く」ことに気を使うあまり、演劇を作るはずがピクニックになってしまったこともある。先述した岩村原太さんと八木優美子さん、それに私の三人で作るヒステリック・ブレインというグループが愛媛県松山市で行ったワークショップがそれだった。「劇場をつくる」というタイトルで始めたワークショップだったが、参加者と話し合うなかでいつの間にか本番はピクニックになってしまったのだ。横に並んで話をしていくと、行き先は思いもよらぬ方向に定まったりもする。「本を読む」もこのピクニック（「ひょっこり！　松山」と名づけられた）も、演劇作品とはあまりにも遠い形をしている。でも私は密かに演劇と呼んでいる。少し前まで演劇は、形式の破壊を喜ぶものだったじゃないか。こんな破壊だっていいじゃないか。よくできた完成がなんだ。そんなことより、人と人がどんな関係を結んで、どんな形式に向かうかを試すところに先鋭性があるんだ…なんて、ごくたまに一人小声で息巻いたりすることもないではない。

私はほとんどの時間を無言の聞き役として過ごし、時折感想を口にする。目的地に自分が立ち、そこから「お～い！こっちだよ。この道をたどっておいで」と指示を出すのでなく、一緒に歩きながら「このまま歩いていくと、この先には私には山が見えるんだけど。あの山に登ると気持ちのいい風が吹いているような気がする。でも、もうひとつの道も見える。それは湖に至る道のように思う。あなたはそちらへ行きたいような気がするけど、どう？」肩を並べて歩きながら、先に見えるものについて言葉を交わす。後先になりながら、行き着く先を決めていく。そんな時間を積み重ねた。

精華小学校では、多くの人々がワークショップを受講された。二十名を越える人々と横一列に並ぶことなどできるはずもなかった。ばらばらとあっちへ向き、こっちへ向きしながら、「あれが見える」「これが見える」と口々に言いながら、私自身も「あれが見える、これが見える」と言いたいと思った。少しでも私に多く見えているのなら、「あれも見えるよ。私はあそこにいけるといいと思うけど」とも口にしたかった。そしてそれでも全体としてはばらばらと「あれが見える」「あそこにいきたい」と口々に主張し、笑い合い、行き先を決めたかった。「こんなところに着きましたけど」でもいいと思った。それが最終的な「本を読む」の成果発表でありたかったのだ。そしてそうなったと思う。

この原稿を書く足元に、娘がパロンと名づけた生後二ヶ月の雄犬が横たわっている。四日前、隣の公園で紙袋に捨てられていたのを拾ったのだ。かつての私なら、決して家に連れ帰ることなどなかったろう。一匹の犬が、私の歩む道をまた攪乱する。私の人生に、本当なら関わらなくてもいい関係がひとつ増え、私はまた翻弄されるだろう。まあ、いいじゃないか。これから追々、彼とも行き先を相談することにしよう。ああでもない、こうでもないと口々に主張しながら…。洗濯機と壁の隙間に眠る子犬は、さびしげで実に貧乏臭い。持ち主にも血統にもルックスにも恵まれなかった不幸な生い立ちが現われている。

そうか、おまえも貧乏性か。「お似合い」という言葉が浮かんで、思わず苦笑している。🐾

■（ももた・のん）一九九五年まで劇団迷夢迷住（みーむみーじゅ）主宰。劇作・演出を手がける。解散後は、ヒステリック・ブレインというグループでの活動を中心に、いくつかのワークショップを行う。「本を読む」や松山市での「松山アーツワーク」など。

WEB「山口 椿の世界」ファンサイト
http://www5a.biglobe.ne.jp/~maoniao/tubaki/01.html

作家、画家、チェリストという様々な顔を見せる「山口 椿」。繊細なデッサンから枕絵、闇に迫る書物からポルノグラフィーまで、その不思議に迫ります。執筆予定・イベント予定・既刊本目録や過去のイベントの画像など満載。

メールマガジン《カムロ カメリア》好評配信中
著者と、ゆふまどひ氏のご協力により最新情報やここだけでしか読めない書きおろし連載などの情報を配信。購読申込（無料）はWEBトップページから。

●その他、オリジナルポストカード・山口氏直筆画入り著作本・朗読MDなどをご紹介しています。

いのうえ なおこ　STUDIO Fitz
inoue-mne@mvd.biglobe.ne.jp / TEL＆FAX:078-302-4207

精神保健福祉

千早振る『うつ病者の手記』三年目

時枝　武

『うつ病者の手記　自殺、そして癒し』（人文書院）と云ふ本を上梓して三年が経つた。彼の本の第二章に当たる処で断酒した其の後の様子を日記として書き綴つた。彼の時は此れと云つた離脱症状を感じる事も無く断酒する事が出来た。然し凡そ半年後に飲酒癖は戻つてきた。難なく断酒してしまつたが故に最も簡単にスリップしてしまつたのであらう。

其れ以降の飲酒体験の凄じきこと筆舌に尽くし難い。特に月刊「少年育成」（大阪少年補導協会）の連載を終へ本が出来上がつてしまひ此れと云つて為す可きことが無くなつてからの体験は凄じい。覚醒状態に在る事が苦痛だつたから強い睡眠薬と酒を飲み眠り起き直ぐ再び睡眠薬と酒を飲むと云ふ生活が暫く続いた。一日の内二十時間近く眠つていたやうな時期も在る。

彼の本の内では三回の自殺未遂が語られてゐる。本を世に問うて暫しあと山口愛子と云ふ東京に住む女性から手紙を貰い彼女との交際が始まつた。掛替の無い女性と交際すると云ふ幸福に恵まれたにも拘わらず其の様な中でも私の精神は荒んでいつた。一九九九年の七の月には私も山口愛子も待ち望んでゐた「恐怖の大王」は遣つて来なかつた。私は恋人がゐるにもかかわらず昨年十二月初め四度目の自殺未遂を起こした。今迄ならば致死量に満たぬ眠剤を呑んでゐたのだが彼の度は其れに加へて大量の降圧剤を呑んだ。脳に十分酸素が行き渡らなくなる即ち生き残つたとしても植物人間になつてしまうことが多く在るとの事であつた。集中治療室に入れられ最初の晩は可成り暴れ四肢を拘束された。看護婦さんにも可成りの暴言を吐いていたやうだ。

退院しても飲酒癖は直らなかつた。いや余計に飲むやうに成つたのではないだらうか。私の鬱状態は益々昂じていつた。然うして歳が明け二〇〇〇年一月十二日には入院する準備を凡て整へて単科の精神病院を訪れた。私には其の集中治療室の入院を含め五回の入院歴が在るが二十年来の主治医の居る病院には精神科の病棟は無い。重症の患者は他の病院の精神病棟を紹介され比較的軽症の患者は其の病院の内科病棟に入院することになつてゐた。以前に精神科外来に勤務してゐた看護婦さんが内科病棟の婦長さんをしてゐたので内三回の入院が奇跡的に可能だつたやうなものの婦長職の人事交代が在り事実上精神科からの入院患者は其の病院の内科病棟は受け入れなく成つてゐた。主治医は単科の病院のアルコール外来のドクターに紹介状を書いてゐたので私はそのI医師の元を訪れた。実は以前にもI医師の元を訪れ断酒を心懸けたのであるが挫折してゐたのだ。然うでは無い。飲酒をする事が其れ程精神を荒ましめるものだとは其の時気付いてゐなかつただけなのである。

I医師は私に断酒を勧めた。私は自分がアルコール依存症ではないことを理詰めでI医師に訴えた。然し悉く論破されていつた。I医師としては一種の認知療法的なアプローチをしてゐたのだと今は思つてゐる。取り敢へず断酒して様子を見る事に成り最後に「病棟を見学して往きますか?」と云はれ私は其れを二ツ返事で承諾した。精神病棟の光景は私にとつて初めて見るものであつた。

精神病棟の

内部のことは多くは語るまい。私の訪れた病棟は県立の病棟であつたが故おそらく医師や看護人による前近代的な暴行紛いの処遇は行われてゐなかつたであらう。然し動物染みた叫び声や黙つて私の後を着いて来る見知らぬ患者を見て私はたぢろいだ。二重の閉鎖扉や外部から鍵を掛けられてしまう病室など私は悪夢だと思つた。

身体的な

病いに関しては病棟も細分化されてゐるのに何うして精神病棟は何のような疾患であれ一律に同じ病棟に入れられてしまうのであらうか。鬱病者の求めて止まぬ平穏な環境は或る種の患者の意味不明な振る舞ひで最も簡単に乱されてしまうのだ。私には分裂気質の友人がゐるのであるが彼と話をする時には私のテンションが可成り高く無いとコミュニケーションを取り難い。分裂気質の典型である中井久夫先生の診察を受けた時も或る種のテンションの高さを必要とした。診察の後には一時的にカンフル剤を打たれたかの如く一日や二日は好調が続いたものである。分裂気質の人からは一種緊張した張り詰めた空気が感じられるものだ。

話が逸れてしまつたが結局は精神医療は金に成らぬと云ふ事であらうか。フリージャーナリストの月崎時央さんと定期的にEメールの遣り取りをしてゐる。彼女は制度的な問題には詳しい。上京した折りに一度会う約束をしてゐるが其れも山口愛子の不調のため実現出来ないでゐる。鬱病の気楽さからか精神医療を巡る制度的な問題を勉強する事を怠つている。

然し私は思ふ。今年の六月二十四日に大精連（大阪精神障害者連絡会の略称で愛称をぽちぽちクラブと云ふ）の集会に参加したのであるが鬱病者と分裂病者がメンタルな部分で連帯するのは無理だと思つた。制度保障の面でなら共に行政と闘へる。然し其のやうな限定つきの連帯は分裂病者は好まぬのではないかと私は思う。分裂病者は実存での関わりを求めるのでは無いのであらうか。

アルコールの話に戻ろう。兎にも角にも二〇〇〇年一月十二日を以つてして今日まで一滴も酒を飲まずに過ごしてゐる。急性離脱症状も半月程で粗方消えた。血圧や体重や肝臓の諸数値も正常に戻つた。今はアルコール外来への通院も二週間に一度から四週間に一度に減り其の代わりAA（alcoholics anonymous）のクローズド・ミーテキングに週一回通うやうに成つた。カトリツク教会の施設を借りて行つてゐるのであるがクローズドで在るが故に医師も神父も参加出来ない。断酒会と云ふと酒焼けした初老の男の仲間同士の支え合いというイメージが在る。（若し違つてゐたら断酒会の皆さん許して下さい）。然しAAでは個人主義を守るが故に有らゆる思想や信条や経済的利得から独立してアルコールを止めると云ふ事のみに於いて連帯するのである。メンバーは凡てニツクネームで語られ正しく匿名でありミーテキングの時間が終わり建物を一歩出れば全く赤の他人である。日本人の好きな二次会は無く其の感じがなんとも清々しく心地良く家路に着く事が出来る。孤独で在るが故にアルコールを止めると云ふ事に於いてのみ赤の他人と親密に成る事が出来るのである。

此のやうに

AAのミーテキングは基本的にカトリツク教会の施設を借りて行なふのが通例のやうである。然し実際のクリスチャンより厳しい個人主義を貫いている。「連帯を求めて孤立を恐れず」と云つた人々は今リストラに危機に遭ひ居酒屋で愚痴を零してゐる事であらう。本当の連帯を知りたければ居酒屋の椅子を蹴つてAAのミーテキングに来るが良い。果たして団塊の世代の人々は其の緊張に堪へる事が出来るであらうか。

AAの創始者は米国人であるが彼もまた鬱病で在つたと云ふ。アルコール依存症者が抑鬱に陥る事も有触れた出来事である。此のやうな絶望を知つてゐるからアルコール依存症者は連帯出来るのである。

AAのミーテキングに於いては屡々笑声も混じる。絶望を超えた人々の笑いが団塊の世代の人々に判るであらうか。リストラの憂き目に遭ひ抑鬱的になつて自殺する人も少なくは無いであらう。私はAAに参加しているが故にアルコール依存症からの生還者であるが故に云ふ事が出来る。「我々は」と。

（付記）

非病者には、AC、共依存、解離と言っても理解されないのに、うつと言うとおのずと理解されてしまうということを指摘しておこう。時枝は、非病者による、うつに対する安易な理解を厳しく戒めたいと思う。うつ病は感情移入可能な病いであるが、それゆえに安易な了解が成り立ってしまっている。かかる事態は、精神を病むものにいくら理解を示す非病者にとっても病者はマイノリティとして認知されている証左であり、そのような偽善的な非病者に対し、時枝は怒りの苦さを噛みしめないわけにはいかない。非病者は現代社会の闇について知りたければ、せめて隠喩としてでいいから病いについて謙虚に「自力で」学ぶべきである。なぜなら病者は、どのような病いであれ、程度の差こそあれ、病んでいるがゆえにみずからの病理を語る能力に乏しいからである。時枝自身のうつ病の病理に対する解答は評論「とりこみの病い」の評価が世に問われた後に語ることにしよう。

■（ときえだ・たけし）一九六二年年生まれ。神戸大学大学院修了。専攻、数理論理学。『うつ病者の手記　自殺、そして癒し』（人文書院、一九九七年初版、現在第四刷）小知堂文化事業有限公司より漢訳され出版される予定。昨今、俳句とは直喩（対比）の文学であると確信し、俳句の創作に没頭している。季刊「船団」（坪内稔典氏代表）に四十七号より参加の予定である。俳号は「時枝武」ではなく、「時枝武。」である。〈焼酎と放射能吐く村上龍〉〈中東の立松和平原爆忌〉〈秋遍路山田詠美が子を宿す〉〈春夏秋冬毛利衛の放屁かな〉――識者のひんしゅくをかう日々を過ごしている。

うつ病者の手記
―自殺、そして癒し―
時枝　武 著
定価1800円＋税　四六判
ISBN4-409-34017-4

三度の自殺未遂を経た一人のうつ病者が、三年間にわたって書き綴ったみずからの固有の物語。治療する側が書いたのではなく当事者の書いた、生の声のにじみ出た本。

人文書院
〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9
TEL:075-603-1344　FAX:075-603-1814
http://www.jimbunshoin.co.jp

言葉と文学

言葉という原罪

――「癩」の表記をめぐって

森 ひろし

私に限ったことだろうか。かねてから刮目している著述家の文章を広告で見つけると、深く考えずに雑誌を買ってしまう。そして、最後まで読み通せぬまま（場合によってはまったく読まないで）いわゆるツンドク本の中に紛らせてしまう。しばらくすると、単行本が上梓される。「今度こそ」と気分を一新して購入するが、結局いつでも読めるという安堵感からか、怠慢に身をゆだねてしまいがちになる。やがて文庫版が登場する。この段階ではさすがに自制心がはたらくものの、結局、文庫本まで揃えてしまった著作も少なくない。この先にはまだ著作集やら全集が控えている。さすがにそれらを買い求めることは滅多にないが、ここまででも十分不経済な話だ。つまるところ私は、新刊書店や版元にとって恰好のカモであるにすぎない。

＊

だが、近頃こんな経験もあった。ある著作の単行本と文庫版の間に偶然見つけたわずかばかりのヴァリアントに、躓いてしまったのだ。その著作は、桶谷秀昭『昭和精神史』（一九九二年、文藝春秋）である。初出誌と単行本にあった四十数字が、九六年に収録された文春文庫版から削除されていた。

叙述の流れを示すため、前段のパラグラフから長い引用を行う。削除されたのは「　」で括った箇所だ。

高畠素之が『資本論』の翻訳をはじめた頃、ほぼ同時に『資本論』を訳しはじめて、その第一分冊をすこし早く世に出したのが生田長江で、それは大正八年のことであつた。彼はすでに明治四十四年に、ニイチェの『ツァラトゥストラ』を翻訳して、森鴎外『沈黙の塔』をその序の代りに付けた訳書を新潮社から出版してゐた。彼は文藝の批評家でもあり、独特の文体の持主であつた。『ツァラトゥストラ』の崇重な文語体は、萩原朔太郎の昭和に入つての最後の詩集『氷島』の文体と措辞にその翳を投じてゐる。また、生田長江はダンテ『神曲』、フロオベエル『サラムボオ』の翻訳もしてゐて、『サラムボオ』の口語的律文体ともいふべき文章は、横光利一の『日輪』の文体に露骨に影響してゐる。

しかし、『資本論』の第一巻第二篇「貨幣から資本への転化」までを翻訳した第一分冊が、高畠素之からてきびしい誤訳指摘を受け、〔さらに「癩的資本論」とまで罵倒されて、〕第二分冊以下の翻訳を放棄した。〔事実、彼は癩を病んでゐて、その兆候があらわれはじめてゐた。〕

（「第一章　昭和改元」）

一般論として、初出誌・単行本・文庫版・全集版などの発表形態は一つの作品の完成へのプロセスと見なせるから、どの過程でいかに改変されようと、ひとえに作者の創造の自由の範疇に属する。そう言えないわけではない。実際には文芸作品などにあまたの事例があり、不穏当な表現に対する読者の指摘や、いわゆる人権擁護団体などの抗議を容れて（場合によっては自主規制して）改変する事例は少なくないかもしれない。単行本化の過程のみならず、文庫への収録に際してさえ、誤字・誤植の訂正にとどまらない改訂が加えられることもあり得ないことではない。だが、たいていは断り書きが付されるはずだ。この事例においてそれがないのは、「癩」にかかわる事柄だったからだろうか。喉に刺さった魚の小骨のように、そんな疑問が残った。

もう一つの、より大きなこだわりは、著者が桶谷秀昭氏であったことだ。

批評という

表現ジャンルの要諦の一つが、自他への欺瞞に対してあたうかぎり峻厳な姿勢を貫くことにあるとすれば、桶谷氏をそのような批評家の数少ない一人と考えていた。氏が叙述に歴史的かなづかいを用い、太平洋戦争でなく大東亜戦争、終戦ではなく敗戦という呼称に固執する理由もこの要諦にかかわるはずだ。イデオロギーの拘束から自由であるための、戦中派の氏にとっての必然だというのが私の了解だった。『昭和精神史』および同『戦後篇』を「日本浪曼派的史観」とする書評もあったが、それは何かの「主義」という色分けで著者を括る誤解を招きかねない。歴史観の問題もまた、批評の姿勢と分かちがたく結びあっている。

この一件は、そんな桶谷氏の叙述にかかわるものでなければ、気づいても読み捨てたかもしれない。

＊＊＊

文庫版が刊行された一九九六年、「らい予防法を廃止する法律」が施行された。前後して日本らい学会は、日本ハンセン病学会と改称している。

らい予防法が廃止されたのは、ハンセン病が感染力が低い病原菌による感染症であり、隔離する必要のないことが世界的な常識であるにもかかわらず、強制隔離や断種などの政策が採用され続けていたからだ。今日では有効薬が開発され、結核同様、治癒可能な病気である。これを遺伝病とする見方はまったく根拠のないものであることが明らかになっている。

だが、日本は長らく国際常識に逆行して隔離政策を続けてきた。そこには発病すると顔や手足に著しい変形をきたす症状に対しての、厳然たる差別や偏見があった。らい予防法（一九〇七年制定、五三年改定）が差別と偏見を助長し、差別や偏見が法律の撤廃をさまたげる観念の温床となった。医療法制の誤りの根底に、「異形の者」へあらぬ眼差しを注ぐ（あるいはこれを直視することができない）日本的な風土の問題が横たわっていた。

しかし私自身も、かろうじて以上のようなことを最近のメディアによって啓蒙された一人でしかない。

高畠素之（註1）が生田長江（註2）による『資本論』の翻訳の欠陥を「癩的」と罵倒したのは、ハンセン病に対する大正期の共同的な無意識の、高畠における反映であったろう。そしてそれは、昭和の精神の来歴に文明史的予言者としての生田を甦らせるために桶谷氏が高畠の残酷な評語をあえて紹介したことにも、幾分かは反映していたかもしれない。そうでなければ、ハンセン病の現在の認識に照らして過去の呼称に差別や偏見がつきまとってきたという客観的な理由から、この著者が削除に応じるだろうか（註3）。

私に何か言えるのは、このあたりまでだ。

実際には

いろいろなやりとりがあったのだろう。文庫版『昭和精神史』の「文庫版のためのあとがき」に改変についての断り書きはないが、版元の関係者に対する謝辞に「いろいろ御苦労をかけた」という言葉がある。そんな苦労のなかに削除の一件も含まれていたのか、と忖度するばかりだ（註4）。

＊＊＊

癩とは、すべからく用うべからざる言葉だろうか。おびただしい差別や偏見に纏われてきたとはいえ、削除や言い換えによって事終われりとはいかない場合もある。

癩菌の発見によって遺伝病という妄説が覆され（一八七一年）、発見者ハンセン（ノルウェーの医師）の名が冠されるまで、病の名は漢字文化圏ではもっぱら癩と呼ばれた。白川静『字統』によれば、古来中国では「頼とは天与のものをいい、癩は神聖病とされた」という。不治の病だったゆえか。『論語』雍也篇に登場する伯牛はこの病を患い、師・孔子を嘆かせた。『史記』刺客列伝には晋の予譲が復讐のため身に漆を塗って癩者を装った、とある。癩は、むろんわが古典にも登場する。明恵は癩者に自分の肉身を裂いて与えたいと願った、という。福音書を繙けば、やはり「癩」という訳語に行き当たる（のみならず、「唖」「聾」「石女」「癲癇」などの言葉にも）。不治性を含意する病名だったがゆえに、マルコやマタイは神の子イエスの奇蹟を伝え得た、とも言えるのだ（現代の聖職者には注釈を付す責務があるとしても）。島尾敏雄『夢の中での日常』で表現されている、主人公のシュールな恐怖の対象は「レプラ」である。

言葉に罪があったのではない。誤りやすい人間が言葉に余計な観念を付着させてきたのだ。あるいは、余計な観念を表出しようとした人間にこそ罪があると言うべきか。言葉と観念とを分かち得ないとするならば、である。いっそのこと、言葉には人間の原罪がなにがしか刻印されている、と言いたい気さえする。言葉を削りとり、言い換えを行うことに、密かに原罪を拭い去ろうとするような咎を感知するからだ。今日の視点からは錯誤や頽廃をはらんでいる表現で

LaVue ラ・ヴュー

本紙は、京阪神地区の主要書店（一部東京）・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次Webに掲載しております。

なお本紙は、読者の方の評価による「投げ銭」及び「木戸銭」というパトロンシップによって、発行するスタイルを志向します。頒価100円は、読者の方の「投げ銭」の目安です。また、本紙の賛助会員として一口年会費1000円（5号～8号までの定期購読料＋送料＋投げ銭＋特典）を「木戸銭」として申し受けております。本紙を確実に入手していただくには、この会員になられるのが一番です。また、一緒に愉しんでお手伝いただける方を募っております。

■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。

■ 郵便振替：「るな工房」00920－9－114321

あっても、それゆえにこそ、その時代のあるがままの意識と無意識の表出としての言葉は保存した方がいい。

人は誰も　現在において無謬であろうと振る舞うが、未来においてまで無謬であることはできない。まして多少なりとも表現に携わる者には、避けて通れない穴が穿たれている。表現は残るものであるから。可能なのは、未来のみならず現在においてさえ誤りやすい存在である、表現者としての自己に対して自覚的であること、および誤り得ることへの責任を引き受ける覚悟、それしかない。

＊＊＊＊

ところで、この問題とは無関係に、私は最近、偶然ある著作に巡り遇った。そして「蒙を啓かれる」という次元を超えた読後感を受け取っている。高山文彦『火花――北条民雄の生涯』（一九九九年、飛鳥新社）という一冊だ。

北条民雄（註5）については拙い予備知識があるだけで、『いのちの初夜』一篇も読んでいなかった。ほとんどこの一作が知られただけで、ハンセン病患者だった北条は二十三歳の若さで死んだ。北条民雄とはペンネームであり、本名が誰なのかさえ知られていない。ハンセン病が遺伝病と見なされていたがゆえに、社会による家族・係累への迫害を恐れた彼自身によって封印された（否、封印を余儀なくされた、と言うべきだろう。歌人・明石海人も、同様の境涯を背負った人である）。

著者は、この書の序文で次のように述べる。

私はこれから手繰り寄せようとしている物語のなかで、病の名をハンセン病とはしるさず、「癩」と呼ぶことにする。その作家が生きた時代にハンセン病の呼称はなく、ハンセン病と表記すれば、その時代の実感を充分に伝えることが危ぶまれるという理由からだけではない。その作家が死力を尽くして闘い、呪詛し、そして生き抜いた病の名が癩だからである。彼を作家として奮い立たせたのが、癩だからである。

これからはじまる物語は、北条民雄という作家が癩病の悲惨をいかに生きたかを描こうとするものではない。彼自身書いているように、ひとりの文学志望の青年がたまたまハンセン病という病を得て、人間としてどう変わり、いかに生きて死んだかという物語である。彼のひとつひとつの言葉は、死後六十年という歳月を経たいまもなお、生命そのものの声として私たちの魂を根底から揺さぶってやまないだろう。そして文学の師と仰いだ川端康成とのため息の出るような深い交わりは、われわれ日本人が見失って久しいある覚悟と情熱を豊かに思い出させてくれるだろう。

紹介を続けたい文章だが、十分だろう。

一つだけ付け加えるなら、私が心を惹かれたのは、北条の短くも凄絶な生の燃焼もさることながら、ここに描かれた、彼が師として敬愛し、『いのちの初夜』と北条民雄の名を世に送り出した川端康成の、無私にして無垢な文学者としての応接である。高山氏は、それを「覚悟と情熱」という語で示している。ハンセン病患者への眼差しが差別や偏見に覆われていた昭和初期にも、奇跡のような師弟の絆があった。

それは、この師弟の間で文学が至上の価値として信じられていたゆえだろうか。

最後に　述べておきたいが、桶谷秀昭氏の『昭和精神史』を貶めるつもりは私において毛頭ない。この大著の価値と意義は、いささかなりと損なわれていない。全体の書評を述べずに部分的な瑕疵をあげつらうのは礼を失する、との思いを拭えない。

氏は、人間が生涯に実現するものは、「その有限の限界の輪郭を鮮明にすることによって、かへって彼が頭脳の中にたくわへて実現できなかつたものを暗示する」と考える。そして、人間の意識の実現された結果に重点を置く通常の歴史とは異なり、「実現されなかつた内面を実現された結果とおなじ比重において描く」ことが『昭和精神史』の方法だと記している。

川端と北条の交わりもまた、この著者の壮大な企てと繊細な叙述の網に拾われても遜色のない、時代の精神の一齣であったかもしれない。❦

（註1）　一八八六―一九二八。社会思想家。マルクス『資本論』の初の完訳者。堺利彦らと交わり、ロシア革命をわが国へ紹介。その思想の軌跡はキリスト教から社会主義、さらに国家社会主義へと傾き、晩年は赤尾敏らを支援した。

（註2）　一八八二―一九三六。評論家・翻訳家。最初ニーチェに心酔し、全集を翻訳・刊行した。『資本論』第一巻の翻訳以後、社会主義批判へと転じ、やがて農本主義的、宗教的傾向を強めた。初の女性誌『青鞜』の命名者。

（註3）　右のような釈然としない思いをある友人に語ったところ、桶谷氏の評論に精通する彼から別の記述について教示を得た。それは『保田與重郎』（一九八三年、新潮社）という著作で、私も読了していた。私自身は読み過ごしていた一節に、「この時代思想「引用註――自己の正義を主張してやまない戦後思想のこと」は、たとへば保田與重郎といふ名前を見ただけでも『一種神秘的な劫罰を受けた癩患者を目にするような戦慄』（川村二郎）を人びとにあたへた」との叙述がある。引用されているのは川村二郎『限界の文学』（一九六九年、河出書房）所収「保田與重郎論」の一文である。なお、桶谷氏の『保田與重郎』は、文春文庫版『昭和精神史』刊行の半年後に講談社学術文庫へ収録された。削除や改変は加えられていない。

（註4）　単行本刊行から文庫への収録までの間に、筒井康隆『無人警察』をめぐって論議が沸騰したこと、また収録と前後して、一連の論議に関し「言葉狩り批判」という観点からコミットしていた文藝春秋の雑誌『マルコポーロ』がアウシュヴィッツのユダヤ人虐殺を虚構とする記事の掲載を理由に廃刊されたこと、などを想起するが、いまここでそれらの問題との関連の有無を検証するすべはない。

（註5）　一九一四―三七。小説家。『定本　北條民雄全集』全二巻は創元ライブラリ文庫に、短篇集『いのちの初夜』は角川文庫に収録されている。

もう一つの動き……

内田事務所
（企画・コンサルティング）

図書出版　アリーフ一葉舎
情報発信　GenderfreePress

〒606-8203
京都市左京区田中関田町26
TEL：075-705-0088
FAX：075-705-0080
aleaf@skyblue.ocn.ne.jp

■（もり・ひろし）フリー編集ライター。一九五三年、神戸市生まれ。編集プロダクション勤務を経て、九五年からフリーランス。

■本紙は●哲学／思想●文学●詩●映画●舞踏／ダンス●演劇●音楽●アート●コミック●生活●医療福祉●教育●スポーツ●インターネット●フェミニズム●セクシュアリティ●風俗●出版などをテーマに、思想・文化情況の〈現在形〉を各執筆者のトポス＝視点から批判＝論評を試みます。そして表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換＝相互性を志向します。また本紙は、ウェブマガジン『カルチャー・レヴュー』（http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/review1.html）とリンクしておりますので、併せてお読みください（「ヤフー」他のウェブ検索で〈カルチャー・レヴュー〉あるいは〈黒猫房〉のキーワードで最初にヒットします）。

■本紙5号の予告（2001/03/01発行）◆〈詩〉という希望の原理（仮題）／高橋秀明◆「源氏物語」語り（仮題）／ゆふまどひ・あかね◆魂脳論序説／中塚則男◆「複製技術時代の芸術作品論」の現在性について（仮題）／平野真◆日本一あぶない音楽―私の河内音頭入門（仮題）／鵜飼雅則◆私はその存在を肯定したい……立岩真也『私的所有論』『弱くある自由へ』を読む（仮題）／加藤正太郎

■本紙への感想・投稿・叱咤・激励・投げ銭・木戸銭など、熱烈歓迎。

■本紙4号および『カルチャー・レヴュー』の合評会を01年1月13日（土）午後2時より開催予定ですので、奮ってご参加ください。場所等の詳細は『カルチャー・レヴュー』のウェブで確認されるか、「るな工房」までお問い合わせください。

■編集後記■

★自己決定と自由の条件において、「～する自由」と「～しない自由」を比べた場合に、自由の許容度はどちらが大きいだろうか。そんなことを『カルチャー・レヴュー』別冊02号（00/11/01発行）で論及（「脳死・臓器移植の問題構成」に関する素描）しましたので、ウェブ版で読んでいただけると幸いです。

★ゴチック様式の硬質な論理もよいが、風通しがよくてしなやかで粘りのある感受性のほうが、関係における〈可能性〉としては、より大きいように思う今日この頃です。

★本紙は本号にて第一期を逐え、来春刊行する5号からは第二期のスタートです。そこで改めて本紙発行の趣旨を述べれば、執筆者の無名／有名に関わらず、かつ思想的あるいは趣味・嗜好性の相違を超えて、その寄稿者の〈現在形〉としての表現の顕現、そしてその表現の「交差」を通して「他者」との新たな関係性が開かれてくることを目指しています。

★「ハンマーで打ち砕かれしロゴスのセンチメントな呻き寒天を裂く」（黒猫房主）

シャノワール・カフェへようこそ

■Web「Chat noir Café」サイトのご案内■
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html

- シャノワール・カフェ・サロン（活動内容・催事案内など）
- 『カルチャー・レヴュー』（14号・別冊02号まで掲載）
- 評論紙『La Vue』への誘惑
- 哲学的腹ぺこ塾（読書会）
- 増殖する〈言葉の杜〉叢書（論考・作品のアンソロジー）
- 現役書店人によるショート・ショート・書評
- ケンキョに書評
- 黒猫房主の周辺（身辺雑記）
- 黒猫房主のお薦めリンク集
- 黒猫の砂場（メイン談話室／毎日更新）
- るな工房@黒猫房出版／営業案内

■シャノワール・カフェグループ（るな工房@黒猫房出版・STUDIO Fitz）では、「商業出版」から「自費出版」まで、企画・編集・製作・DTP・装幀・デザイン・他社発行出版物の販促など、出版全般に関して請け負っております。ぜひ、一度ご相談ください。

■TEL/FAX 06-6320-6426　E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp
■http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

La Vue ラ・ヴュー

■「La Vue」No.4 ■発行日：2000/12/01 ■頒価：100円（税込）■編集委員：いのうえ なおこ・小原まさる・加藤正太郎・田中俊英・山口秀也・山本繁樹
■製作・デザイン：いのうえ なおこ　http://www5a.biglobe.ne.jp/~maoniao/　■発行人：山本繁樹　■郵便振替：「るな工房」00920-9-114321
■発行所：るな工房@黒猫房出版／シャノワール・カフェ ©　大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022　TEL/FAX 06-6320-6426
E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp　http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html　■協賛：哲学的腹ぺこ塾・マジックメモ（村田 豪）
■後援：ヒントブックス http://homepage1.nifty.com/hint-yf/　英出版研究所 http://www.hpri.gr.jp　■印刷所：日本データネット株式会社